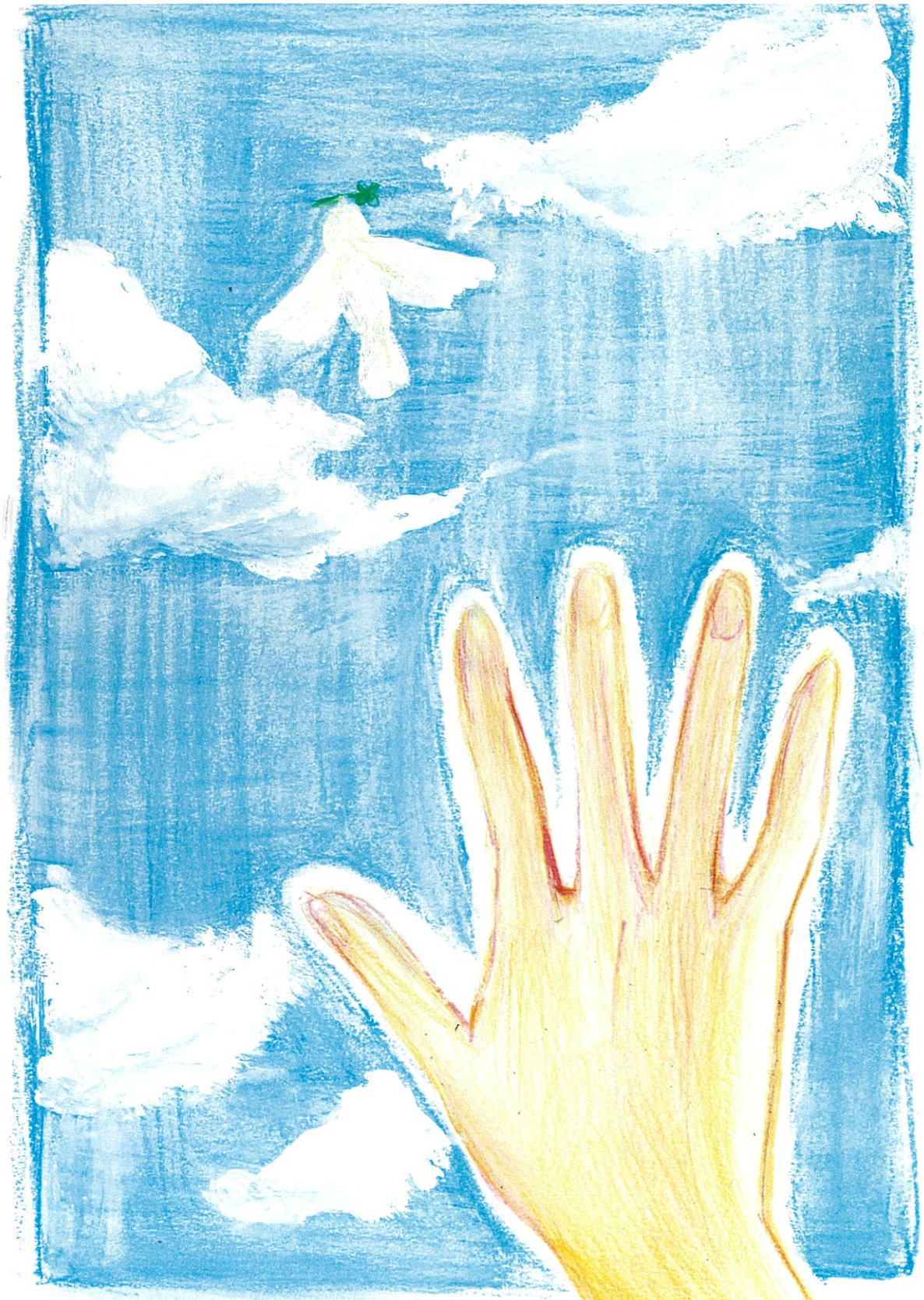


思いをつなぐ

～被爆78年を迎えて～





いいむろゆうこ
飯室優子さん



むらかみあいこ
母 村上愛子さん



令和5年9月5日 富田林市立喜志中学校にて、広島での母の被爆体

験を語る いいむろゆうこ 飯室 優子さん。

被爆体験を語って

今回、私がお話ししたのは私の母の体験談です。

母は子どものころ、広島市の宇品町に住んでいて原爆を体験しました。

母はこれまで、被爆体験について人前で語ることはありませんでした。それはやはり昔のことを思い出したくない、忘れてしまいたいとずっと思っていたからです。

平和絵本の作成についてのお話をいただいた時も、母はお断りしましたが、私は戦争を絶対にしてはいけないとの思いから、母や叔父から聞いた戦争・原爆の恐ろしさや、当時の苦しい体験をみなさんに伝承することで、後世になにかしら残すお手伝いが出来たらとの思いでお話しすることになりました。

この機会に、若いみなさんに戦争について考えてほしいと思っています。

令和5年9月

飯室 優子

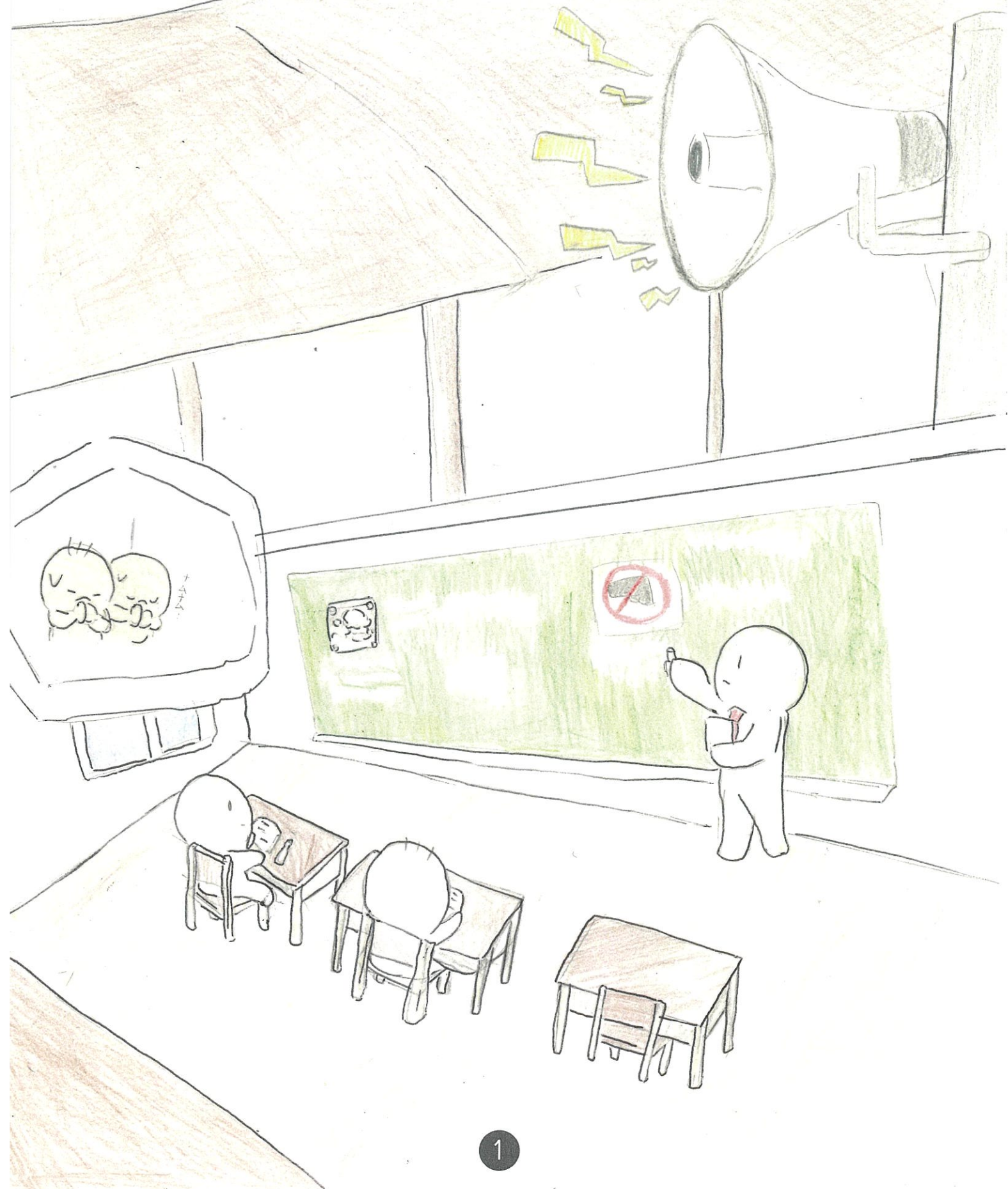
わたし しょうがくせい

私が小学生のころ、

ひろしま がつ かごぜん じ ぶん な ひび もく
広島では、8月6日午前8時15分にサイレンが鳴り響き、黙とうしていました。

そして、学校に集まって戦争について勉強しました。

ひ ぜんこく みな とく わか ひと せんそう かんが おも
この日は、全国の皆さん、特に若い人に戦争について考えてほしいと思います。





わたし しょうがくせい とき
私が小学生の時、
はは ひばくたいけん か
母が被爆体験を書いてほしいと
いららい
依頼されました。
はは くる たいけん おも
母は苦しい体験を思いだし、
なんにち
何日もかかって、
な か
泣きながら書いていました。
はな
これからお話しするのは
はは ひさん たいけん
母の悲惨な体験です。



せんそうとうじ はは さい
戦争当時、母は14歳でした。

がっこう べんきょう つか かた
学校では勉強することはなく、なぎなたの使い方や

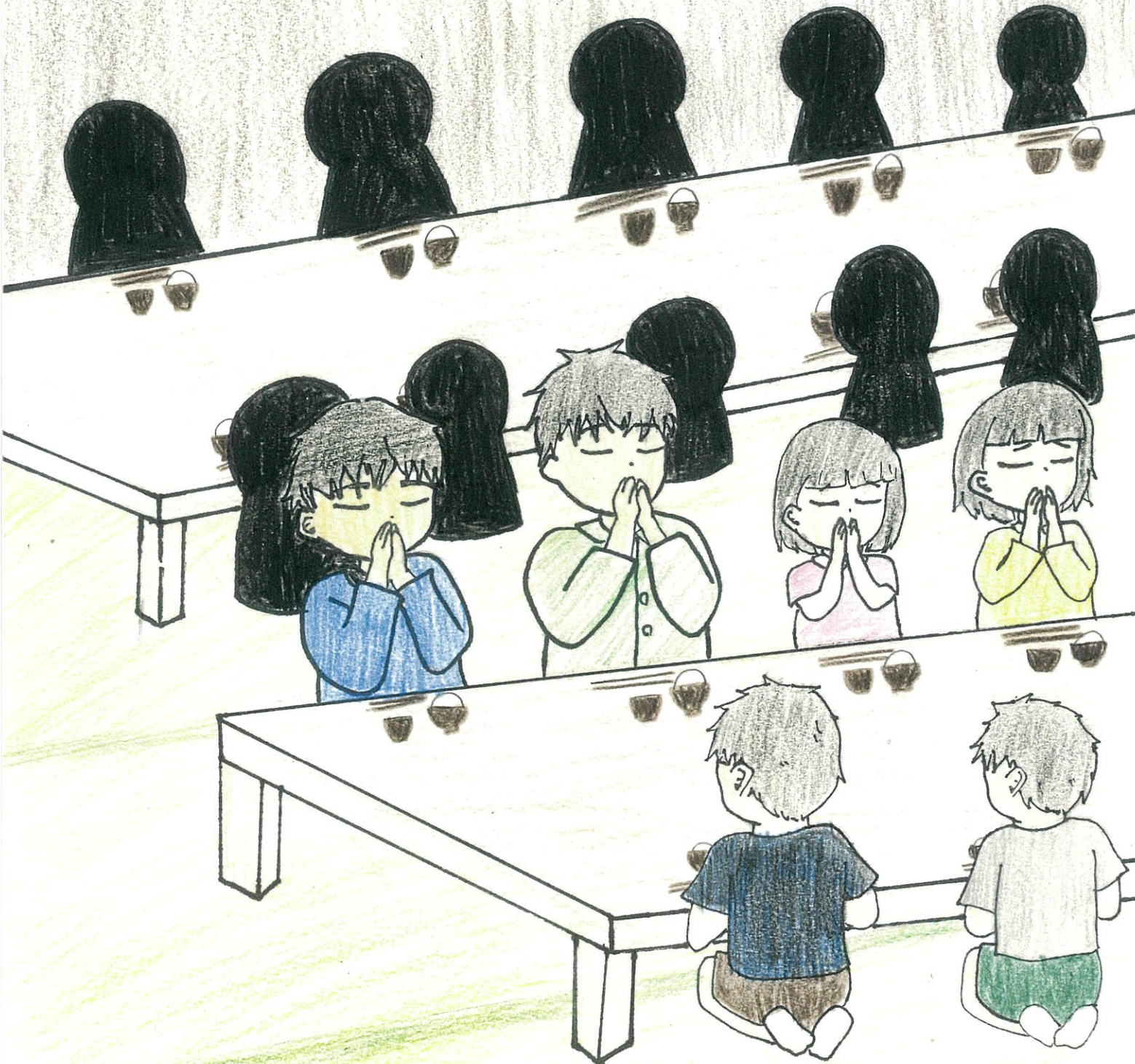
きゅうご しょうか くんれん おこな
救護、消火の訓練ばかり行っていました。

せんそう はげ とし ぶ がくどう くうしゅう み まも
戦争が激しくなると、都市部の学童は、空襲から身を守るため、

こうがい のうそん ちほうとし しゅうだん いどう そかい い
郊外の農村や地方都市に集団で移動させられました（疎開と言います）。



こくみがっこうしょうとうが しょうがっこう じどう ちほう しんせき たよ そかい
国民学校初等科（小学校）の児童は、地方の親戚を頼って疎開したり、
がっこう かぞく はな りよかん じいん しゅうだんせいかつ おく
学校ごとに家族を離れて旅館や寺院などで集団生活を送りました。
さい おとうと がっこう みよし ちほう まち そかい
11歳の 弟 も学校から三次という地方の町に疎開していました。



しょうわ ねん がつ か
昭和20年8月6日

はは さい おとうと いえ はな あそ
母は1歳の弟を家から離れたところで遊ばせていました。

ごぜん じ ふん しょうくう せんこう はし
午前8時15分、ピカッ！上空に閃光が走り、

とつぜん ばくおん め まえ あか おも
突然の爆音とともに目の前が明るくなったかと思うと、

み はげ いろ あた いちめん ひろ
見たこともない激しい色が辺り一面に広がりました。



ぼうぜん こんど ばくふう ぶ
呆然としていると今度は爆風が吹き、

じぶん じょうたい わ
自分がどういふ状態なのか分からなくなったそうです。

め な み
目が慣れてくると見えてきたのは、

いえいえ やね ぶ と つぶ なみう こうけい
家々の屋根が吹き飛んだり、潰れたりして波打っている光景でした。



はは たいせつ おも おとうと わす ひとり いえ に かえ
母はいつも大切に思っていた 弟 のことも忘れて、一人で家に逃げ帰りました。
いえ かえ ははおや おとうと ことば われ かえ
家へ帰って母親の「弟 は？」という言葉で我に返り、
いそ おとうと ところ もど
急いで 弟 の所へ戻ったそうです。


「ごめんね。あんたを一人にして。」





おとうと お さ なに お わ
弟 は、置き去りにされたことも、何が起きているかも分からず、
な ぼうぜん た
泣きもせずに呆然と立っていました。
はは と き いま こうかい
母はこの時のことを今でも後悔しており、
おとうと ぶじ い
弟 が無事に生きていてくれたことを
どれだけ感謝したことか分からないと言っていました。





はは がっこう きゅうごはん
母は、学校から救護班として
げんぱく とうか ばしょ む
原爆が投下された場所へ向かうことになりました。

そこは地獄のような光景でした。
たても のくず けむり た なか ある い
建物は崩れ、煙の立つ中を歩いて行きました。
なつ きおん も ひ
夏の気温なのか燃えている火のせいなのか
とても暑かったそうです。



げんち よこ ひとびと みず みず
現地では、横たわる人々が「水をください、水をください。」と

すぐのように手を差し出して来ました。

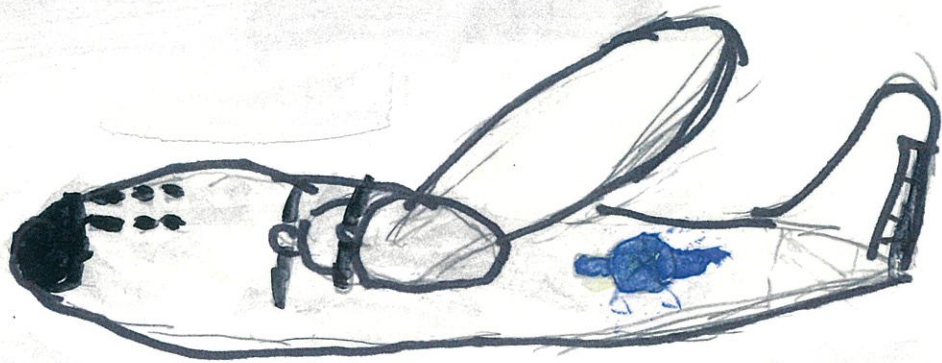
ちか かわ ひと みず もと かわ はい
近くの川では、人が水を求めて川に入っていて、

おお ひと かわ う
多くの人が川に浮いていたそうです。

やけど お ひろ ひと
ひどい火傷を負い、皮膚がはがれた人もたくさんいて、

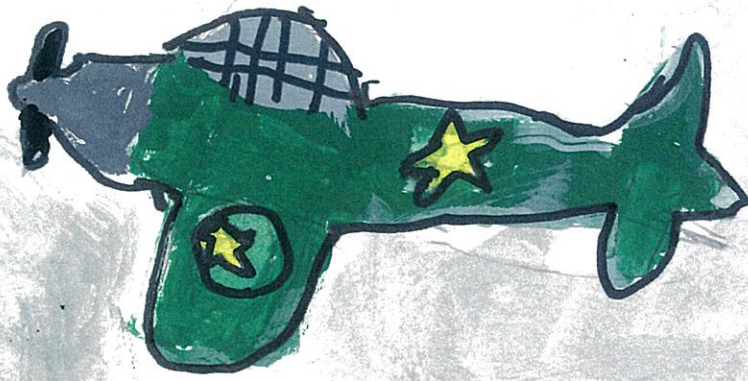
いた むご
痛ましく惨いものだったそうです。





げんばくとうかご げんち なん ばくだん
原爆投下後、現地では何の爆弾だったのか、
ひがい ひろ
被害はどこまで広がっているのか、
なに し だれ き
何も知らされず、誰も来てはくれませんでした。
ひ た ほうしゃのう のこ あぶ ちいき し
日が経っても放射能が残っていて危ない地域だということも知らず、
みんな たす あ
みんなで助け合っていくしかなかったそうです。





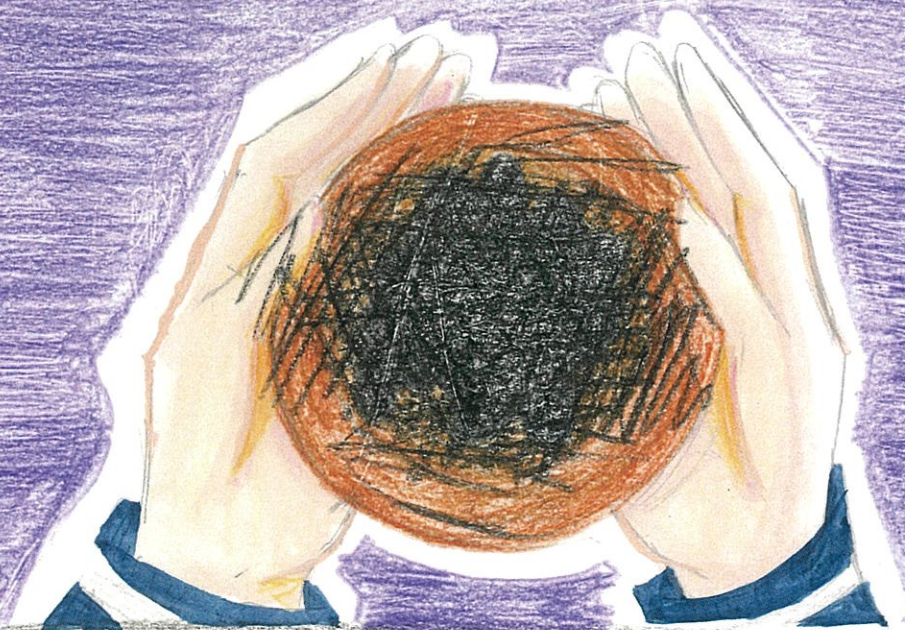
ひろしま くさき は
もう広島には草木も生えず、
ここにいたら病びょうき気しになって死しんでしまうという噂うわさも立ち始めました。



はは かぞく しんせき たよ みはらし いじゅう のうぎょう
母の家族は、親戚を頼って三原市に移住して農業をすることになりました。



せんご のうか じやくのうほん こめ やさい せいけい た う もの
戦後は農家でも食糧難でした。米や野菜は生計を立てるための売り物で、
自分たちが食べるものはカエルやバツタの佃煮などでした。
きちよう げん た つら
貴重なタンパク源でしたが食べるのが辛かったです。




ふゆ さむ とま ほ がき つく
冬は、寒い土間で干し柿を作りました。

しょうがつ そふ まち う い かえ すこ かく も かえ
お正月に祖父が町に売りに行き、帰りに少し隠して持って帰り、

はは た
母たちに食べさせてくれたそうです。

なに い
それが何よりおいしかったと言っていました。





せんそう げんぱく けいけん かた ひと ねんねん へ
戦争や原爆のことを経験し、語る人は年々減ってきています。
なか いま ひばく こういしょう なや ひと
その中には、今もなお被爆の後遺症に悩まされている人たちがいます。



わたし まご しゅうがくりょこう
私の孫は修学旅行で
ひろしま い
広島に行くそうですが、
せんそう かくへいき
戦争や核兵器がどれだけ
おそろしいものなのかということをつた おも
伝えたいと思っています。

せんそう ぜったい
戦争は絶対にしてはいけません。
せんそう な
戦争により亡くなられた
かたがた あいとう い ささ
すべての方々に哀悼の意を捧げます。

時をつなぐ私たちの思い

～ 絵本の制作に取り組んでいただいた皆さんに思いを綴っていただきました。～

【富田林市立喜志中学校美術部の皆さん】

◇ 石原 一樹

僕は、この絵本作りを通して、戦争の悲惨さなどを知って、もうこんなことは起きてはいけないと思いました。

絵を描くときには、その時代の服装や情景を表現するのをがんばりました。

◇ 小田 翔太

この作品を通じて改めて戦争の悲惨さや悲しみを知って、もう二度と戦争を起こしてはいけないと思いました。

今回は絵本を作らせていただき、ありがとうございました。

◇ 木村 千紘

お話を聞いた時は、本当にこんなひどいことが日本であったのかと疑いたくなりました。それに、描き始めた時も、自分が体験したことのないものを絵にするのがとても難しくて大変でした。でも頑張って描いたので、見てくれた人の心に思いが届けばいいなと思いました。

◇ 公原 野依

私は、原爆が投下してすぐのシーンを担当しました。普通に暮らしていただけなのに、原爆が落ちたら世界が変わってしまったかのように描きました。

戦争はたくさんの人を苦しめていました。だから、一つ一つの命を大切にしたいと私は考えました。

◇ 田中 紅羽

私が描いたページは、「戦争の残酷さを知る人が少なくなっていく中、今でも後遺症に悩まされている人がいる」という描写です。

このページを描く上で、私は戦争についてもっと知る必要があると感じ、お話しいただいたことに合わせて、戦争について深く考え、学びました。

私は「戦争を知らない」側の人間だったので、現実を知ると、もっと色々な人に戦争を知ってもらいたいと思うようになりました。ここで学んだことを大切に生きていきたいです。

◇ 濱本 実和

表紙にこめた物語は、平和を象徴とする「鳥」と若人の空にかざす手で、これからの平和は「若人が創る」という意味を込めています。

時が流れるにつれ、何度も変わった空の青色を守り、これからの時代を鳥が自由に羽ばたける世界を創っていければ良いなと考えました。

◇ 簗城 涼大

お話を聞いて、原子爆弾が落ちたところが怖いと思いました。

見たことのない景色を想像して描くことは難しかったです。でも、みんなで1つの絵本を作るのが楽しかったです。

制作にあたって

原子爆弾によって被害を受けた人の高齢化が進むなか、私たちはさまざまな取り組みを通して、その体験を風化させることなく後世に語り継ぎ、二度と戦争を引き起こさないよう、戦争の悲惨さや平和の尊さ、また核兵器の廃絶を訴えていかなければならないと考えています。

昨年5月にG7広島サミットが開催されましたが、会議において「核兵器のない世界」へ向けて取り組む決意が共有され、G7首脳による核軍縮に関する声明が発出されるなど、被爆地である広島から非核・平和への願いが改めて世界に示されることになりました。

この「時をつなぐ平和絵本」は、市内中学生のみなさんが、被爆された方の体験を聞き絵本にする取り組みで、制作を通して被爆の実相を知るとともに被爆者の平和への思いを受け継ぎ、伝え、広げていくことを目的としています。

この絵本を通して、被爆者と子どもたちの平和への切なる願いが、一人でも多くの人に届くことを期待しています。

最後に、お母様の村上愛子様のお話をいただいた飯室優子様、並びに絵本の作成にご協力いただきました市立喜志中学校美術部のみなさん、そしてご指導いただいた先生方に心から厚くお礼を申し上げます。

令和6年3月

富田林市

思いをつなぐ

～ 被爆 78 年を迎えて ～

令和 6 年 3 月発行

<被爆体験者>

むらかみ あいこ
村上 愛子

<語り>

いいむろ ゆうこ
飯室 優子

<絵・構成>

富田林市立喜志中学校美術部のみなさん

石原 一樹 / 小田 翔太

木村 千紘 / 公原 野依

田中 紅羽 / 濱本 実和

簗城 涼大 / 井伊 香月(構成)

<編集・発行>

富田林市 市民人権部 人権・市民協働課

〒584-8511 富田林市常盤町1-1

0721-25-1000 (代)

※この絵本は、被爆体験者の当時の記憶に基づいて語った内容を
子どもたちが情景としてイメージしたものです。